



液肥に浸し 野菜元気



無農薬の水耕栽培システムをチェックする矢野原良民社長。奈良県香芝市の生物機能工学研究所香芝実験農場（恵守乾撮影）

栄養と害虫駆除の設備 大阪の研究所が事業化

野菜を液体肥料（液肥）に水没させて害虫を駆除する無農薬の水耕栽培システムを、「生物機能工学研究所」（大阪市阿倍野区）が全、高栄養、美味の三拍子

そろった高品質の野菜。農業の工業化を図りたい」としている。

この農法は、医学博士でもある同社の矢野原良民社長（65）が完成させ、「太陽野菜」と名付けた。14個の小さな穴があるコンベヤー式のパネル（縦0・5メートル、横1メートル）で野菜を苗から育てる。対象の野菜はレタス、コマツナなどの葉野菜が中心で、ダイコンなどにも対応できるという。

約30センチのレーンに並ぶパネルは移動して液肥の入った温水と冷水の水槽の上で反転し、計10秒ほど葉を水没させる。これで害虫を駆除する一方、葉から栄養分を吸収させる。パネルは上下2段のレーンに分けて「昼」と「夜」をつくり、これを1日に2回繰り返せば成長を早めることが可能。また野菜を太陽光に直接さらして栽培することで、通常のハウス水耕栽培と比べ、抗酸化物質が大幅に増えるという。さらに、害虫駆除が容易になり、葉を浸す時間の短縮も可能になった。同社には新規参入を目指す企業や自治体、大学などから問い合わせや視察が相次いでいるという。

香芝市の知的障害者更生施設「ゆらくの里」は、障害者が安全に使えるように改良されたシステムを導入し、障害者の手で野菜を生産する計画という。同社は「今後は産官学の提携事業なども展開したい」としている。

きょうの紙面

野菜逆立ち「未来の畑」開発 ②



野菜を液体肥料に水没させて害虫を駆除する無農薬の水耕栽培システムを、大阪市阿倍野区の企業が開発、商品化した一写真。野菜の成長を早めることも可能で、新規農業参入を目指す企業などから注目されている。